

即位礼正殿の儀によせて

令和元年十月 発行

令和元年十月二十二日、即位礼正殿の儀が厳かに執り行われました。天皇陛下をはじめとする皇族方は、伝統的な調度品に彩られる中、古式ゆかしい装束で儀式に臨まれました。



◆衣装・調度

午後一時、東帯や十二単を着用された皇族方が並ばれる中、黄櫨染御袍（ころぜんのごほう）をお召しになった天皇陛下が、皇居の正殿「松の間」に設えられた高御座（たかみくら）に昇段されました。続いて、十二単に身を包まれた皇后陛下が、高御座の隣に設えられた御帳台（みちようだい）に昇段されました。

高御座は、遅くとも奈良時代には天皇の即位式で使われていたとされ、今回のものは、御帳台とともに、大正時代に復元されたものです。

天皇陛下がお召しになった黄櫨染御袍は、平安時代に嵯峨天皇が定めて以来、天皇のみが着用できる色の装束です。

皇后陛下をはじめとする女性の皇族方が着用された十二単は、五衣（いつつぎぬ）、唐衣（からぎぬ）、裳（も）を重ねて着た姿を指します。五衣は、桂（うちぎ）を五枚重ねた姿で、その色の組み合わせを「かさね」といいます。平安時代の高位の女性は、季節などを考慮しながら五衣の配色に工夫を凝らしました。

意外！ その① 即位式で和装束を着用するようになったのは、実は明治時代に入ってからのこと。それまでは中国文化を反映した古代からの形式により、「礼服（らいふく）」という中国風の装束が用いられていました。

意外！ その② 「十二単」と呼ばれていますが、実は十二枚重ねて着るとは限らないのです。元々は桂を重ねて着た姿を十二単と呼んでおり、それに唐衣、裳を加えた姿が、現代では十二単と呼ばれています。



秀学社の『新国語便覧』では、「枕草子の時代」というタイトルで、御帳台（35ページ）、十二単（32ページ）など、平安時代の装束、貴族の邸宅、遊びや食事などを紹介しています。

◆三種の神器

即位礼正殿の儀に先立つ五月一日、「承継の儀」が行われました。天皇が譲位される際に「三種の神器」を受け継ぐ儀式です。

「三種の神器」とは、「八咫瓊勾玉（やさかにのまがたま）」「八咫鏡（やたのかがみ）」「草薙の剣（くさなぎのつるぎ）」の三つで、正当な皇位継承者にのみ受け継がれるものです。

元々この三種の神器は、高天原という天界にいる天皇家の祖、アマテラスオオミカミが所持していたものです。

「八咫鏡」と「八咫瓊勾玉」は、アマテラスオオミカミが洞窟に隠れてしまったという「天の岩戸」事件が起こったときに作られました。「八咫鏡」には、アマテラスオオミカミがそこに宿るとされ、最も重要な神器と考えられています。「草薙の剣」は、スサノオノミコトがヤマタノオロチを退治したときに手に入れたものを、アマテラスオオミカミに献上したとされています。

アマテラスオオミカミは、孫であるニギノミコトが地上の国に降り立つときに三種の神器を授与し、以来、歴代の天皇に受け継がれてきました。

現在、「八咫鏡」は伊勢神宮、「草薙剣」は熱田神宮に祀られており、宮中に祀られているのは形代（かたしろ＝レプリカ）とされています。

平安時代末期の源平の争いにより、「草薙の剣」は、二位の尼（平清盛の妻、時子）とともに海に沈んでしまいます。宝剣が失われたまま、後鳥羽上皇が皇位継承をしますが、のちに順徳天皇の時代に伊勢神宮から送られた剣が「草薙の剣」として祀られ、今に至ります。



秀学社の『新国語便覧』では、ヤマタノオロチの逸話が収録された「古事記（23ページ）」や、草薙の剣が失われた源平の合戦を描いた「平家物語（50～61ページ）」を紹介しています。